

一二七八番

夏影なつかげの つま屋やの下したに 衣裁きぬたつ我妹わぎも 裏設うらしまけて
我あがため裁たたば やや大おほに裁たて

一二七九番

梓弓あづさゆみ 引津ひきつの辺へなる ななのりその花はな 摘つむまで
に 逢あはざらめやも ななのりその花はな

一二八〇番

うちひさす 宮路みやぢを行ゆくに 我わが裳もは破やれぬ 玉たま
の緒をの 思おもひ乱みだれて 家いへにあらましを

一二八一番

君きみがため 手力たちからつか疲れ 織おりたる衣きぬぞ 春はるさらば
いかなる色いろに 摺すりてば良よけむ